

---

## ランチオンセミナー 7

5月16日(土) 12:20～13:10

第8会場 福岡国際会議場 4F (413+414)

# B型肝炎 ユニバーサルワクチネーションへの道のり

講演者：須磨崎 亮 (筑波大学医学医療系 小児科 教授)

司会：百田 浩志 (第64回日本医学検査学会 学会長/社会福祉法人恩賜財団 済生会唐津病院 検査科 技師長)

共催：富士レビオ株式会社

---

B型肝炎はB型肝炎ウイルス(HBV)が血液や体液を介して感染することで起こる。日本には約100万人(全人口の0.8%)のHBV持続感染者(キャリア)がおり、うち10～15%が肝硬変、肝がんに進展する。全世界では4人に1人がHBVに感染し、キャリアは3.5億人、年間50-70万人の人々がHBV関連疾患で死亡する。B型慢性肝炎に対しては、インターフェロンや核酸アナログ製剤を長期間使用するなど身体的・経済的に負担の多い治療が必要であり、しかも完治は困難である。一方、B型肝炎(HB)ワクチンを3回接種すれば、30年以上にわたって肝炎の発症を防ぐことができるので、WHOは1992年に世界中の全ての子どもに、生まれたらすぐにHBワクチンを接種するように勧告した。全員に接種するためユニバーサルワクチネーションと言い、母子感染、小児期の家族内・施設内感染、性交渉などによる成人の水平感染を予防し、感染源の撲滅や肝硬変や肝臓がんなどによる死亡をなくすことが目的である。日本では定期接種に相当する。2013年時点では世界194か国のほとんどで実施済みであり、日本を含めて12か国のみがHBワ

クチンを定期接種化していない。日本では1986年から母子感染を防ぐために、HBVに感染した母親から出生した児に対して抗HBsヒト免疫グロブリンの使用とHBワクチン接種が行なわれ、若年HBVキャリアが著減するなど大きな成果を挙げてきた。しかしHBVの水平感染対策は乏しく、定期接種化への論議が続いてきた。

講演者らは厚生労働省の研究班を組織して、HBワクチン定期接種化に取り組んできたが、本年1月15日の厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会で技術的課題の解決が承認されて論議は終了した。早ければ来年4月から定期接種が開始される予定である。

本講演では、なぜ全員がHBワクチン接種を受ける必要があるのか、今後どのようにワクチン接種を進めていくべきかなど、いろいろな場で問われる疑問点について概説する。さらに、検査医学の現場で極めて重要なHBV院内感染防止方法に関して、最近、米国CDCの指針や日本環境感染学会のガイドラインが改訂された。これについても、その変更内容と実際の対処方法について解説する。